

Publisher's Review

パブリッシャーズ・レビュー

●東京大学出版会・白水社・みすず書房のPR紙●



みすず書房の本棚

[無料送付]

No. 27 2018 夏

(表示価格は税別です)

113-0033 東京都文京区本郷2-20-7 tel. 03-3814-0131 www.msz.co.jp

よみがえらせる人、 ロラン・バルト

野崎 歓

シニフィアン、シニフィエやコノタシオン、そしてもちろんエクリチュール。難しい概念やキーワードの数々を、ぼくはバルトの本を辞書と首っ引きで読みながら勉強した世代の人間である。構造主義や記号論の高揚がまだ冷めやらぬ時期のことだった。そうやって詰め込んだ言葉の数々は、いまはもう忘れてしまってもいいと思わないでもない。それらの「現代思想用語」をたどえ手放したとしても、なおその大切さが失われることのない、つねに新鮮なバルトが存在すると確信しているからである。

バルトはたえず変貌し、次々に異なる知的モードを身にまとい、読者の目を眩ませ続けたという通念が一方にはあるだろう。しかし実のところ



バルト 1942年

初めて通読したバルトの本は『ミシュレ』だった。これが実に驚くべきテキストで、バルトの批評は発見の喜びと読むことの愉悅に満ちたものであった。

のだからイメージ以上に、ぼくのうちにしっかりと根を下ろしているのは変わらぬバルトであり、文学を終生慈しんだ人としてのバルトなのである。さらにいえば、一九世紀の著作家たちとこのうえなく親密で深い絆を結んだ人がバルトではなかったか。

のだから印象を、忘れがたく刻みつけてくれた。世界は「魚」でしか「女」なのだとか、歴史は抱きしめるべき肉体なのだとか、フランス人は小石からできていてとか、びっくりするような珍説が次から次に出てくる。そのいちいちが、実際ミシュレの著作に見出される事柄なのだ。歴史学が学問として精緻化する以前の、時代遅れの歴史家と思われがちなミシュレを、バルトはきわめて特異な、エキサイティングな面白さに満ちた作家としてよみがえらせたのだ。

もちろん一般には、その文章の二年後に発表された「作者の死」が記念碑的な仕事として記憶されることになったわけである。しかしバルト本人が生前、「作者の死」を単行本に収めようとしなかったことは示唆的であるかもしれない。いずれにせよぼくは、読むことの無限の可能性を主張して、理屈としては実に正論である「作者の死」よりも、シャトープリアンという作者を魔法の杖の一振りでも生き返らせた文章のほうに、バルトの豊かな才能を感じずにはいられない。殺すことにはある意味で容易だろう。だがよみがえらせる仕事には真の創造的才能がいる。そこに批評家としてのバルトの本領を見たい。

ミシュレを敷衍して若きバルトは、フランスは「負の中心」を抱き、フランス王の力は「空に由来する」と書いていた。あたかも「記号の国」での東京論を予告するかのよう

ではなか。皇居を空虚な中心と見立てる論旨は、意表を突く軽やかな知的アクロバットとして読者を唸らせたものだ。だがそこには、かつてのミシュレとの対話の余韻が響いていた。バルトが青年時代、サナトリウムで膨大なミシュレ全集を隅から隅まで読破したというのはまったく、だてではなかったのだ。

ピエール・リシャールを例外とすれば。そしてバルト、リシャールの兩名こそは、新・旧批評の壁を超えて鮮度を保ち続ける、ずばぬけた文体の持ち主だったのである。

一九八〇年二月二五日、バルトはコレージュ・ド・フランスの真向かいから道路を渡ろうとして小型トラックにはねられた。運ばれたサルベトリエール病院で院内感染したバルトは呼吸不全、昏睡状態になり一カ月後に息をひきとる。没後、雑誌などに発表された論考・談話をまとめる第一冊としてスエイツ社から出たのが、このインタビュ集『声のきめ』である。エッセー「パロールからエクリチュールへ」を序文として年代順に、三八本の「逃れることのできない社会的なゲーム(本書より)」としてのインタビュを収録している。

『S/Z』までのバルトは最前線の学者批評家であり、質問も論争的である。答えるバルトもまた、ソシユールから学んだ記号論、ラカンの読解から得た用語などを、同時代分析、文学研究に鮮やかに適用しながら、旧批評を攻撃する犀利な批評家として

てふるまっている(物は何かを意味するのかわか?「映画について」など)。しかし「テキストの楽しみ」と『記号の国』以降のバルトは作家性を帯び、インタビュアもバルトの個人的な意見に大きな関心を持つようになった(「快樂/エクリチュール/読解」「二〇のキーワード」など)。

とりわけベストセラーとなった『恋愛のディスタール』刊行時には『プレイボーイ』誌までが、「現代神話の第一人者、恋愛について語る」の見出しで「スター」としてバルトを扱った。そんな状況に困惑したバルトは、最後のインタビュ「欲望の危機」で「あれはわたしの読者でない読者にまで届いた本です。写真についての本でわたしはへた出しの読者を再び見いだすことになるでしょう」と言う。「明るい部屋」のことだ。数々の自著についてどんな解説より周到に語り、文学、モード、音楽、恋愛、映像を自在に論じるバルトの静かに熱い声の魅力な一巻。『フランス文学・現代思想』【七月中旬刊】(四六判・552頁・¥6,000円)

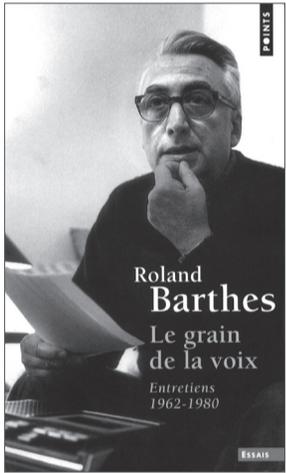
『パブリッシャーズ・レビュー』みすず書房の本棚は年四回発行です。ご送付先の変更の際は、お名前・新住所・旧住所と、お届けしました本紙の帯封コードを、お手数ですがみすず書房営業部までご連絡下さい。

語りつづけるロラン・バルト

ロラン・バルト

《声のきめ インタビュ集 1962-1980》

松島 征・大野多加志訳



Roland Barthes
Le grain de la voix
Entretiens 1962-1980

「パブリッシャーズ・レビュー」みすず書房の本棚は年四回発行です。ご送付先の変更の際は、お名前・新住所・旧住所と、お届けしました本紙の帯封コードを、お手数ですがみすず書房営業部までご連絡下さい。

「クリニクを開業するのは、患者さんたちの身体といつしよに人生の風景を眺める、冒険旅行になぞらえられ



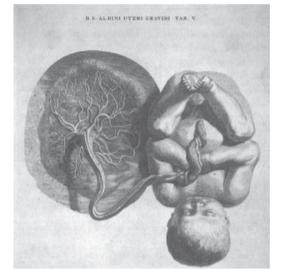
たの冒険の入り口だったのだ。

脳から足の指まで、解剖学的博物誌

ギャヴィン・フランシス

《人体の冒険者たち 解剖図に描ききれないからだの話》

鎌田昉月訳 原井宏明監修



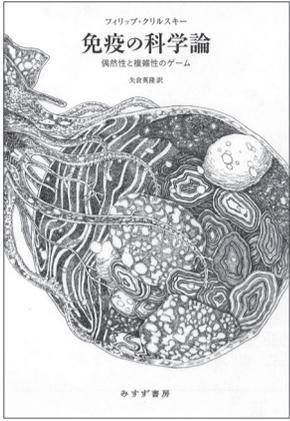
スコットランドの総合診療医フランシスは、ときに救急医や従軍医として、さまざま

全体像をとらえるメタ生物学

フィリップ・クリルスキー

《免疫の科学論 偶然性と複雑性のゲーム》

「免疫力アップ!」「免疫力の低下」はとも日常会話の題だが、免疫とは何かを理解しようとする、とたんに非日常的、かつ難解な世界に足を踏み入れることになる。



カバーイラスト「幻想免疫図鑑 キラーT細胞」作・石井正信(カイクツ)



人はなぜ太りやすいのか 肥満の進化生物学



パン「エイズの起源」山本太郎訳(四〇〇〇円) パワー

「ここにあるすべては、小説のひとりの登場人物によって語られているとみなされねばならない。」

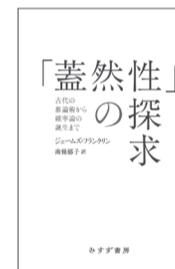
確率の「前史」が塗り替わる

ジェームズ・フランクリン 《「蓋然性」の探求

四〇年ぶりの新訳

石川美子訳 《ロラン・バルトによる

「ここにあるすべては、小説のひとりの登場人物によって語られているとみなされねばならない。」



「蓋然性」の探求 南條郁子訳(三六〇〇円)

民主主義は累進課税を選択しない

ケネス・シーヴ／デイヴィッド・スタサヴェージ 《金持ち課税 税の公正をめぐる経済史》

立木勝訳



「国はいつ、なぜ富裕層に課税するの。今日、これほどタイムリーな問題は考えられないし、これほど鋭く意見の対立する問題もない。」

「蓋然性」の探求 南條郁子訳(三六〇〇円)

みすず書房新刊

(2018.2.5) 東京・文京本郷2-1-1 (価格は税別です)

廣松渉の思想

内在のダイナミズム 大井文 認知症は病気でなく老老の現れ

沖繩 憲法なき戦後

講和条約三条と日本の安全保障 古関彰一 豊下権彦 日米両国の思惑により

石を聴く

イサムノグチの芸術と生涯 ヘレナ 波瀾万丈の生涯をたどり、多岐ジャンルにわたる作品の誕生を克明に解き明かした評伝決定版

ハリウッド映画と聖書

ライオンハルト 時代を映す二百作品を聖書学者が分析。清教徒が建国した米文化の底流を鮮やかに見せる

ウエルス・マネジャー

富田裕子訳(六〇〇〇円) 山本義隆 『磁力と重力の発見』全三巻(一八〇〇円、二二〇〇円、二六〇〇円)

「電気ショック」の時代

ニューロモデュレーションの系譜 ショーター／ヒーリー 電気ショックは精神疾患を治せるか。開拓者の証言がショック療法の実像に迫る

福島第一廃炉の記録

西澤丞 現場作業員の目録で撮影された記録写真集。約100点の写真に、原子炉の現況図や廃炉工程表などの解説を添えた

憎しみに抗って

エムケ なぜ世界で集団的憎しみが高まっているの。そこから自由になるには、いまを必死に読む。浅井晶子訳(三六〇〇円)

戦争文化と愛国心

海老坂武 皇国の小国民として迎えた敗戦、そして戦後。再び日本を覆う戦争文化とたたかい。非戦への道を探る。三八〇〇円

イサム・ノグチ エッセイ

「新しい石庭」日本の「あかり」ランプ」ほか全28篇。世界的彫刻家が石を彫る手づむいだ思索の軌跡。北代美和子訳(四六〇〇円)

PTSDの医療人類学

ヤング 外傷性記憶の起源から、DSM-IIIの検証、治療の実態調査まで。あらゆる問題に立ち向かう書。中井久夫訳(七六〇〇円)

精神疾患は脳の病気か?

ヴァレンスタイン 向精神薬をとりまく科学的諸言説と虚構を描写する。薬物療法主体の時代の必読書。功力監訳(五四〇〇円)

一次愛と精神分析技法

バrint 欲動、対象関係、技法をテーマとした全20章。フロイト以後の精神分析学の成果を提示する。森研次・中井訳(七四〇〇円)

クレーの日記

「新装・兩人と二」 第一線の研究者が詳細に校訂・編集した新版の「日記」。今日の読者に向けた訳と造本を贈る。ケルステン編 高橋文子訳(七二〇〇円)

臨床日記

「新装版」 フレレンツィ フロイトの一番弟子が一九三二年に書き付けた日記。精神分析史上に残る重要なドキュメント。森茂起訳(六六〇〇円)

往復書簡

「1949-1982」 二世紀音楽を代表した二人の巨匠の五〇通から明らかにする現代音楽創造の現場と二人の友情・距離。決裂。笠野史子訳(六二〇〇円)

憲法9条へのカタバシス

木庭麗 カタバシス(時間軸を遡り、2項戦力不保持から連立を覆す)ホッパス論まで、ローム法学者が見透す9条の構造。四六〇〇円

中井久夫集

1966-1988 いじめの政治学 子も社会におけるいじめの進行過程を、孤立化・無力化・透明化の三段階の政治的隷属化として分析した表題作他全30編。三四〇〇円

老後という海をゆく

看取り医の回想とこれから 大井文 認知症は病気でなく老老の現れ。老老はまたやがて死ぬための自然の恵み。人間の生老病死を見つめる人生賛歌。二七〇〇円

兵士といつも

ドイツ兵捕虜記録に見る戦争の心理 ナイツェル／ヴェルツァー 画期的史料に見る軍の実体。各国に衝撃を与えた歴史学と心理学の共同研究。小野寺拓也訳(五八〇〇円)

公共図書館の冒険

未来につながるヒストリー 何をすべきか、何ができるのか。図書館員から可能性を考える。柳田村編(三五〇〇円)

書評コラム

人が理解するマネーから人々を理解するマネーへ。デジタルIDの権威が、マネーの誕生から現在までをたどり、ビットコイン後のマネー像を描きだした未来学の登場だ。

沖繩を知らなければ、日本の「自画像」が浮かぶ。本書は沖繩を切り口に、日本という国の在り方と行く末を問うている。

「マネーは、いまや中期に...」 古代表ビットコイン、中世イングランドの合札から、ウエスタン・ユニオン社の電子送金サービス、ニクソン・ショック、ケニア等の決済・送金サービス、Mペサまで、マネーの歴史をたどることで、本書はこう結論する。

「私たちがマネーに関する固定観念を調整して、未来のパラダイムを探求し始める必要がある。マネーは古代ビットコインで記録が始まる前から存在した。そしてビットコインが忘れ去られてからも存在し続けるだろう。だがビットコイン人たちが使ったマネー、私たちが使っているマネー、そして未来に使われるマネーはどれも、まったく異なっている(はじめに)」

マネーテクノロジーの未来史

デイヴィッド・バーチ

《ビットコインはチグリズ川を漂う》

松本 裕訳



「美を手がかりに問う、本当の豊かさ」 芥川喜好《時の余白に》(続)

電子マネーと電子識別の権威である著者が描く未来のマネー像は、私たちのアイデンティティと分かちがたく結びついたマネー、そして、中央銀行の拘束から解放された、コミュニティの批判(レピュテーション)に基づくマネーだ。

マネーの三大機能を踏まえつつ、マネーの過去と未来を架橋し、新たなパラダイムを提示する。

「美を手がかりに問う、本当の豊かさ」 芥川喜好《時の余白に》(続) 二〇〇六年から長期連載が続いている読売新聞人気コラムの書籍化第二弾。第一線で美術記事を書いていた練達の記者が、世相の片隅に息づく美を手がかりに、本当の豊かさとは何かを深沈と問いかけ

渡辺 豪 古関彰一・豊下楯彦 《沖繩 憲法なき戦後》を読む



も一貫していたことは「沖繩メッセージ」によって浮き彫りになる。同メッセージで昭和天皇が「沖繩の主権を日本に残す」ことに固執したのは、「本土の安全を確保する上で好都合だったからだ。」「主権」によって日本が沖繩と繋がっている。」「沖繩の米軍が日本防衛と関わりをもつことになる」という、本土としての利点である。

先ず「脅威」に対抗する手段として、沖繩の基地集中を既定戦略と捉えているのが実情だ。本書が終戦で安全保障政策の針路について「大胆な見取り図を提起」しているのは、こうした思考停止状態からの覚醒を促す狙いもあるように感じられる。

著者は、北朝鮮や中国の脅威を掘り下げて検討する重要性を説き、新たな「共通敵」の設定が必要だと唱える。共通敵とは「際限なき軍備拡張であり緊張の激化」である。背景には「北東アジアや東アジアの緊張が激化するれば、軍事の要石」である沖繩が最前線に位置付けられ、場合によってはふたたび戦場と化すことになる」という危機感がある。

沖繩に今なお「捨て石」の役割を強いているのは、本土の「私たち」なのだ。「わたなべ・つよし ジャーナリスト」▽《沖繩 憲法なき戦後》(前面下に広告)

「美を手がかりに問う、本当の豊かさ」 芥川喜好《時の余白に》(続) 二〇〇六年から長期連載が続いている読売新聞人気コラムの書籍化第二弾。第一線で美術記事を書いていた練達の記者が、世相の片隅に息づく美を手がかりに、本当の豊かさとは何かを深沈と問いかけ

美を手がかりに問う、本当の豊かさ

芥川喜好《時の余白に》(続)

「美を手がかりに問う、本当の豊かさ」 芥川喜好《時の余白に》(続) 二〇〇六年から長期連載が続いている読売新聞人気コラムの書籍化第二弾。第一線で美術記事を書いていた練達の記者が、世相の片隅に息づく美を手がかりに、本当の豊かさとは何かを深沈と問いかけ

月刊雑誌 《みすず》 最近号より

酒井啓子「移動する人々の時代は続く」

内理恵「戦争と児童文学」

三浦哲哉「小泉武夫の怪食快食、絶倫食」

池内紀の「いきもの」

岡真理「魂の破壊に抗して」

山内一也「天然痘」

麻生牛彦「岡真理」

「ガザ」人間の境界として

野寺拓也「ナチズム研究の現在」

植田実「私の家」と「ハウスA型」

「根絶」と「復活」

「元・下谷区竹町」

「春の雪」

「依存症、かえらるるもの」

「中村和恵」

「三浦哲哉」

「池内紀」

「岡真理」

言葉の創造性をめぐる21の断章

ダニエル・ヘラー=ローゼン

《エコラリアス 言語の忘却について》

関口涼子訳



「根絶」と「復活」

「元・下谷区竹町」

「春の雪」

「依存症、かえらるるもの」

「中村和恵」

「三浦哲哉」

「池内紀」

「岡真理」

「山内一也」

「麻生牛彦」

「ガザ」人間の境界として

「野寺拓也」

「植田実」

「根絶」と「復活」

「元・下谷区竹町」

ロラン・バルトの本 没後40年を前にして

現代思想にかぎらない影響を与えてきたバルト。1975年に彼自身が分類した段階によれば、(1)サルトル、マルクス、プレヒトの読解をつうじて生まれた演劇論、『現代社会の神話』(2)ソシュールの読解をつうじて生まれた『記号学の原理』『モードの体系』(3)ソレルス、クリステヴァ、デリダ、ラカンの読解をつうじて生まれた『S/Z』『サド、フリーエ、ロレー』『記号の国』(4)ニーチェの読解をつうじて生まれた『テキストの楽しみ』『ロラン・バルトによるロラン・バルト』などの著作がある。そして『恋愛のディスクール・断章』『明るい部屋』を出版したが、その直後、1980年2月25日に交通事故に遭い、3月26日に亡くなった。没後も、全集や講義ノート、日記などの刊行が相次いでいる。



零度のエクリチュール 新版

バルトを一躍フランス文学界に登場させた書。精妙な註を付した、オリジナル版からの明晰な新訳。石川美子訳 2400円



テキストの楽しみ

46の断章から編まれた「身体的思考」によるロマネスク。後期の代表作が意図の新訳により蘇った。鈴木和成訳 3000円



ロラン・バルト 喪の日記 石川美子訳 3600円

- ◆単行本 ラシーヌ論 渡辺守章訳 5000円
批評と真実 保井瑞穂訳 2500円
モードの体系 佐藤信夫訳 5000円
物語の構造分析 花輪光訳 2600円
サド、フリーエ、ロレー 篠田浩一郎訳 3600円
新批評のエッセー 花輪光訳 2600円
恋愛のディスクール・断章 三好郁朗訳 2600円
文学の記号学 花輪光訳 2600円
明るい部屋 花輪光訳 2600円
テキストの出口 沢崎浩平訳 2600円
ロラン・バルト 喪の日記 石川美子訳 3600円

- ◆ロラン・バルト著作集「全10巻」 石川美子監修 ※は品切れ
1 文学のユートピア 1942-1974 渡辺諒訳 5000円
2 演劇のエクリチュール 1951-1957 大野多知志訳 ※
3 現代社会の神話 1957 下澤和義訳 ※
4 記号学への夢 塚本昌則訳 ※
5 批評をめぐっての試み 1964 吉村和明訳 5000円
6 テキスト理論の愉しみ 1965-1970 野村正人訳 ※
7 記号の国 1970 石川美子訳 ※
8 断章としての身体 1971-1974 吉村和明訳 2600円
9 ロマネスクの誘惑 1971-1977 中地義和訳 5000円
10 新たな生のほうへ 1978-1980 石川美子訳 4000円

- ◆評価など
ロラン・バルト伝 カルヴェ 花輪光訳 8000円
ロラン・バルトの遺産 マルティン・コンパニオン/ロジェ 石川・中地訳 4000円
書簡の時代 コンパニオン 中地訳 2600円

書物復権

10出版社共同復刊 [5月]

スピノザ エチカ抄

神=自然を説きながら、人間の自由を幾何学の形式にしたがい論証する。新訳。[新装版] 佐藤一郎編訳 ¥3400

アーレント=ハイデガー 往復書簡 1925-1975

「情熱的な恋」に始まり、世紀半ばの試練をこえて育んだ関係、深めた対話。[新装版] 大島・木田訳 ¥6400

東京裁判

第二次大戦後の法と正義の追求

戸谷由麻 司法事件として分析し、国際人道法の発達を先導との再評価を可能にした意欲作。[新装版] ¥5500

生のものと火を通したもの 神話論理 I

レヴィ=ストロース 構造人類学の頂点、20世紀思想の金字塔。主著『神話論理』第1巻。早水洋太郎訳 ¥8000

新装復刊

[7月]

自由論

バーリン 政治思想史家の4論文。ミルをモデルに選択の自由と人間的責任を強調。小川晃一他訳 ¥6400

資本の時代

1848-1875 [全2巻]

ホブズボーム 資本主義が生んだ資本家と労働者の社会・文化を、世界規模で描く。柳父園近他訳 各¥5200

関係としての自己

木村敏 生命と存在への透徹したまなざしをとおして、「私」そして「自己」のありかたの謎にせまる。¥3600

マトイス 画家のノート

『ジャズ』『ダンス』についての手紙、デッサンや色彩の覚書… その革新と思想の広がり。二見史郎訳 ¥6400

最後の日々をどう生き、いかに終えるか。その希望はどうか。それら叶うのか。本書は、これまでに35人の看取りに関わった訪問診療医が語る、患者たちのさまざまな死の記録である。

現代日本で自身の望む最期を実現しようとすると、患者はさまざまな障壁に直面することになる。それは、あるときは「死は敗北」とばかりにひたすら延命しようとする医師の姿をとる。またあるときは目前に迫る死期を認識しない親族や患者自身が障壁となる。そして、病院以外での死を「例外」とみなし、老いを「予防」しようとする行政と社会が、患者を望まない最期へと導いていくこともある。

しかし著者の患者たちは、日々の往診の際に著者と語り合ううちに、それぞれの最期のあり方を見いだしていく。8割が病院で死亡する現代日本において、著者の患者は、その7割が自宅での死を選ん

患者とともに、最期のあり方を模索する

小堀鷗一郎

《死を生きた人びと 訪問診療医と355人の患者》



「死は「普遍的」という言葉が介入する余地のない世界である」。日本の終末医療が在宅診療・在宅看取りへと大きく舵を切りつつある今、必読の書『終末医療・高齢化問題』（四六判・216頁・二四〇〇円）

■反響をよぶテレビ番組 インタビューも NHK B S 1にて6月10日(日)夜、合計10分にわたり、著者の出演するドキュメンタリー番組「在宅死」に際の医療」200日の記録」放映。また新聞に著者インタビュー記事も掲載。

▼関連書 ガワンド「死すべき定め」原井宏明訳(二八〇〇円) ボラージオ「死ぬとはどのようなことか」終末期の命と看取りのために」佐藤正樹訳(三四〇〇円)

「トラウマとその治療経験」他 全32編 中井久夫集7 《災害と日本人》 [第7回配本] 1998-2002

阪神・淡路大震災以後、心的外傷は臨床実践に移され「このケア」という概念は一般にも浸透しつつあった。一方でそれは、戦争や地震、台風等の災害で心的外傷を負いつつも自然治癒に委ねるほかなかつた人びとを発見し、災害後に生まれる共同体意識の両面性を再認識する契機ともなった。日本人の災害経験を精神医学的に鳥瞰した表題作ほか、「トラウマとその治療経験」「阪神間の文化と須賀敦子」など全32編を収録。「目次抄」本棚一つの詩集たち。須賀敦子さんの思い出。私の人生の中の本「祈り」を込めない処方効かない(?)「分裂病と人類」について。災害被害者が差別されるとき。犯罪の減少と少年事件。二十世紀を送る。精神科医の精神健康の治療的意義。医学・精神医学・精神療法は科学か。精神医学・エッセイ」 [七月月上旬刊] (四六判336頁・予三六〇〇円)

神谷美恵子 『生きがいについて』 『100分de名著』 5月放映 オーディオブック化も

受賞図書 野村悠里 『書物と製本術』 ルリユール『綴じの文化史』が、第39回日本出版学会賞(二〇一七年度)奨励賞を受賞しました。(七五〇〇円) また同氏は、本書、および論文「ルネサンス期のルリユール(日仏図書館情報研究)」(オトバンク配信 <https://audiobook.jp/>)。『生きがいについて』をはじめとする神谷美恵子コレクション全五冊(各一六〇〇〜二二〇〇円)や、ハンディな「神谷美恵子の世界」(一九〇〇円)も好評。近藤宏一『闇を光に』ハンセン病を生きる(二四〇〇円)も重版出来です。(五五〇〇円)

『中井久夫集』(全11巻) 既刊 1 働く患者 1964-1983 / 2 家族の表象 1983-1987 / 3 世界における索引と徴候 1987-1991(以上各三二〇〇円) / 4 統合失調症の陥穽 1991-1994 / 5 執筆過程の生理学 1994-1996 / 6 つじめの政治学 1996-1998(以上各三四〇〇円)



『近刊シルヴェスター』 『ジャコメッティ』 彫刻と絵画」武田昭彦訳 お待たせいたしました。今月下旬刊行予定です。一九六四年、著者を聞き手におこなわれたジャコメッティ・B B C インタビューを完全収録。



シルヴェスターの肖像

本紙『パブリッシャーズ・レビュー』ご案内 出版情報紙『パブリッシャーズ・レビュー』は、東京大学出版会 <http://www.utp.or.jp> (5・11月) 白水社 <http://www.hakusuisha.co.jp> (1・4・7・10月) みすず書房 <http://www.msz.co.jp> (3・6・9・12月) の三社が、毎月15日に発行しています。ご希望の方に無料でお届けいたします。送付のお申込は発行の社ごとに承りますので、お手数ですがどうぞ上記の各ウェブサイトよりご連絡ください。

みすず書房 近刊のお知らせ 7-10月の刊行予定から

映画『夜と霧』とホロコースト E. ファン・デル・クナーブ編 庭田よう子訳 羞恥 チョン・スチャン 斎藤真理子訳 世界不平等レポート 2018 トマ・ピケティ他 徳永優子・西村美由起訳 アフリカ眠り病とドイツ植民地主義 磯部裕幸 予測不可能性 あるいは計算の魔 イーヴァル・エクランド 南條郁子訳 心理療法の実践(仮) C. G. ユング 横山博監訳 大塚神一郎訳 ヴェネツィアの石 抄 ジョン・ラスキン 井上義夫訳 壊れゆく農村に宿る中国(仮) 梁鴻 鈴木将久訳 ヒトラーのモデルはアメリカだった J. Q. ホイットマン 西川美樹訳 プルジョワ フランコ・モレッティ 田中裕介訳 (www.msz.co.jp/book/new/ にもご案内)

みすず書房・最近の重版より

憎しみに抗って——不純なものへの賛歌	¥3600
生きがいについて	¥1600
神谷美恵子コレクション 柳田邦男解説	¥1900
神谷美恵子の世界	¥2400
闇を光に——ハンセン病を生きる	¥2400
近藤宏一	¥2400
思春期とアタッチメント [新装版]	¥3200
林もも子	¥3200
メディア論——人間の拡張の諸相	¥5800
M. マクルーハン 栗原裕・河本伸聖訳	¥5800
全体主義の起原 1 [新版]	¥4500
H. アーレント 大久保和郎訳	¥4500
翻訳学入門 [新装版]	¥5400
J. マンデイ 鳥飼玖美子監訳	¥5400
デザインとヴィジュアルコミュニケーション [新装版]	¥3600
B. ムナーリ 菅野有美訳	¥3600
磁力と重力の発見 1——古代・中世	¥2800
山本義隆	¥2800

弊社も参加する『書物復権』10社の会は、品切になっていく書籍の復刊事業を二十年以上にわたって継続しています。読者の皆様からのリクエストに基づいて書目を選定しますが、毎年、多様な年代の方々からご要望をいただきます。以前に読んだことがあるが現在手元に無く、懐かしいか、ご確認ください。

全国の協力書店にて『書物復権』フェア開催中です。開催店は、弊社ホームページにてご確認ください。